

真ク・リトル・リトル神話大系 4

Tales of Cthulhu Mythos at Last

那智史郎 編 バベル翻訳会 訳 国書刊行会

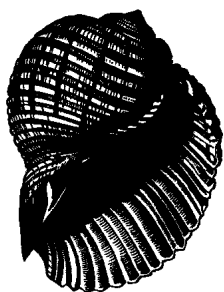
那智史郎

1949年長崎県生。

1972年西南学院大学文学部卒。

怪奇小説、怪奇映画の研究を趣味となす。

現在、福岡県在住。



真ク・リトル・リトル神話大系

第4巻

昭和58年1月25日印刷

昭和58年1月31日第1刷発行

2,900円——定価

セイユウ写真印刷株式会社——印刷

大口製本印刷株式会社——製本

落丁本・乱丁本はおとりかえます

著者——H・P・ラヴクラフト 他

編集——那智史郎

発行者——佐藤今朝夫

制作・松井克弘+井口倫太郎

発行所——株式会社国書刊行会

東京都豊島区巢鴨3-5-18 郵便番号170

電話 03-917-8287 振替東京5-65209

目次

Contents

ポーの末裔 H・P・ラヴクラフト & A・ダーレス……………7

深海の罟 B・ラムレイ……………47

納骨堂綺談 A・ダーレス & M・スコラー……………59

顔のない神 ロバート・ブロック……………83

幽遠の彼方に A・ダーレス……………107

夜歩く石像 フランク・B・ロンゲ……………145

ク・リトル・リトル神話研究——ラヴクラフト論——G・T・ウィッツエル……………247

解説……………279

The Dark Brotherhood by <i>H. P. Lovecraft & A. Derleth</i>	7
Cyprus Shell by <i>Brian Lumley</i>	47
The Occupant of the Crypt by <i>A. Derleth & M. Scholer</i>	59
The Faceless God by <i>R. Bloch</i>	83
Beyond the Threshold by <i>A. Derleth</i>	107
The Horror from the Hills by <i>F. B. Long</i>	145

本文イラストレーション——権泰年 8, 60, 146, 248 坂上知之 48, 108 白川まり奈 84
ブックデザイン——神田昭夫

ポーの末裔

The Dark Brotherhood

H・P・ラヴクラフト & A・ダーレス 福岡洋一 訳



シーコンク川にかかるワシントン橋とレッド橋にはさまれた人口の少ない地区で、川のはとりのとある丘の上の廃屋が不審火によって焼失する事件が起きたが、出火の原因が完全に究明される日はおそらく永久に訪れないであろう。例によって「耳よりな」情報を提供できるという「善意の協力者」たちが大ぜい名乗りをあげ、警察も対応に苦慮したが、アーサー・フィリップス以上の強い信念を抱いてやってくる者はひとりもいなかった。このフィリップスというエンジェル街に長く暮らしている若者はイースト・サイドの旧家の血をひいており、いささか混乱した考え方をするきらいはなくてもないが一途なところがあって、火災を引き起こすに至った顛末と称するものを手記の形にまとめたのだ。警察はそのなかに登場したり名前のがったりした人たちに逐一あたって事情を聴いたが、結果ははかばかしくなかった。図書館の職員の証言で、フィリップスとローズ・デクスターがそこで一度会ったことがあるという事実は証明されたものの、ほかには何ひとつフィリップスの主張を裏づける証拠は出てこなかった。問題の手記とは、次のようなものである。

I

東海岸沿いの街ならどこでもいい、夜の通りを歩いてみさえすれば、奇態なもの、恐怖を呼び覚ますものの、^{よこしま}邪なものどもの姿をいくらかでも見出すことができる。つまり平素の街の姿からは窺い知れぬ物かげから、日常性の裂け目の奥の隠れ家からそうしたものを誘い^{いざな}寄せるものは夜の暗闇——ただそれだけがかれらに——、もうあまりにも以前のことで何故そのような薄暗い隠遁所で暮らすことを選び取ったか、

その理由すらも臍^{おへら}にかすんでしまった者たちに、東の間の自由を恵み与えてくれる。畸形、世捨て人、病める者、老いさらばえた者、憑^{まよ}きものが憑^{まよ}いた者、そして魂を失なった者——未来永劫にわたって自身身の探索をつづけねばならぬ運命^{さだめ}のかれらが動きまわれるのも夜の帷^{かたびら}に隠^{かく}れてのこと、陽の光はこの者どもにはあまりに冷酷すぎる。苛^{いら}烈な戦いに傷つき敗れた男、生きることに倦^うみ疲れた女、かれらの不幸の源は幼児期に受けたまま未だに癒^{なを}せぬ心の傷あとであったり、人間に対して辟^ひかれてゐるわけではない禁断の領域を犯してまで知識を追い求めた倨^{きよう}傲であったり、だからこそ人びとが集まって住むようになってある程度の時間が経過した場所には、かならずこうした悲惨の種を背負った者たちがつぎつぎに生まれ出ないわけにはいかない。ただ、かれらが姿を見せるのもあたりが闇に沈む時間だけのこと、夜にはばたく蛾にも似て、わずかのあいだごく限られた地域を動きまわっては、ふたたび陽の光が射す前にそそくさと隠れ家に逃げ帰ってしまうのである。

元来孤独な性格だった私は、完全に治りきる見込みもない病気があったおかげで大抵のことならわがままを許してもらえたことも手伝って、小さい頃から夜に外出する癖がついていた。子供の頃はほとんど他所^{よそ}へ移ったことはなかったから、最初のうちはやはりエンジェル街の自宅の近くばかりだったのが、やがて少しずつ足を延ばしはじめ、行動範囲はこのプロヴィデンスのあちこちに広がっていった。昼間はというと、健康状態が良ければシーコンク川沿いに街を出て野山に向かうか、いちばん体力のあった頃なら注意深く選んだ少数の仲間と、街からさほど遠くない林のなかにかんりの手間をかけて作った「クラブ・ハウス」で遊ぶこともあった。それに読書にもずいぶん熱中し、祖父の大きな書庫に何時間も籠^{かご}り、手あたりしだいに読み漁^あって膨大な知識を吸収していった。ギリシア哲学からイギリス王室の変遷史、古代の錬金術の秘儀からニールス・ボーアの実験まで、エジプトのパピュルスに記^しされた伝承からトマス・ハー

デイの地域性についての研究書まで。祖父の読書の対象領域はじつに広く、専門に偏ることを嫌っていたため、買い集めた書物も自分なりにすぐれていると判断したもの、つまり祖父自身がどうあっても読まないわけにはいかぬと考えたものばかりであった。

だが街に夜が訪れると、いつだってほかのことも良くなるのだった。夜の彷徨はほかの何にも増して私の心になじんだ営みとなり、少年期の終わりごろからはじめて青年期に至ってもなお、依然その嗜好には変化の兆^{きざし}が現われなかった。ときおり病気が突発的にぶり返すので学校にも満足に出席を続けられなかったしがなく、そのうちに私はますます自閉的な、孤独な人間になっていった。そんな私が夜の街を彷徨^{さまよ}うことにかくまでこだわったのはいったい何を求めてのことだったのか、薄暗い通りのどこがそんなに私を惹きつけたのか、私は知らない。古びたベネフィット街の町並み、ポー通りの暗がり、広いプロヴィデンスのなかの、ほとんど知る人もないようなこうした地域をなぜ歩きまわったのか、暗い路地や裏道をこっそりすり抜けてゆく者たちの顔つきを密かに盗み見て、そこに何を見出したいと願ったのか、いまその問いに答えることなどできはしない。日中の仮借ない現実からの逃避と、夜の闇に紛れてはじめて見えてくる街の隠された一面に対する飽くなき好奇心、そんなものがないまぜになったのが、或いは私の夜の彷徨の理由だったかもしれない。

ハイ・スクールを卒業したらもっとほかのいろいろなものにも目を向けるようになるのではないかと周りでは思っていたようだが、その期待は実らなかった。私もできることならブラウン大学で研究を進めてみたかったが、健康状態が不安定でとても入学できそうもなかった。この挫折の結果、私の孤独な営みにはいつそう拍車がかかって読書に耽^{かか}る時間は倍に増え、夜の外出時間も長くなり、そのために昼間に睡眠をとるという生活がはじまった。それでもなお、ほかの点ではごく普通の暮らし方を守って、父に先立た

れた母や同居中の叔母を顧みないようなことはなかった。そのうちに以前の仲間が私から離れていってしまったが、幸いローズ・デクスターと新しく知り合うことができた。ローズはプロヴィデンスに到着した最初のイギリス人の家系の娘で、黒い眼と均整のとれた身体つき、容姿の美しさはなかなかのものだった。しかも彼女は私の懇願を聞き入れてくれ、私は夜の彷徨の伴侶を得ることになった。

それからはローズを伴ってプロヴィデンスの夜の探訪がつづき、私はすでに自分が見つけ出したものをひとつひとつローズに見せてまわることに精を出し、そこに新たな喜びを見出していた。ローズと初めて出会ったのはあの古い図書館で、その後も夕方そこで会い、その門を出て夜の街へ足を踏み入れるのが常であった。はじめはごく軽い気持でつきあってくれたローズにも、やがて夜の外出が何ものかの探究としての意味を持つようになったのか、私に劣らぬ熱心さで隠れた抜け道や久しく使われたことのない小道を探り始めた彼女は、ほどこなく私同様に夜の街にすっかり精通するまでになった。それにローズは用もないのに喋りどおしでなければいられないような性格ではなかったから、私の相手としてはまさにうってつけだったのである。

こんな風にプロヴィデンスの探訪を続けて何カ月かが過ぎたある晩のこと、ベネフィット街を歩いていた私たちは、見知らぬ紳士から声をかけられた。私たちが通りに入ったとき、その紳士は少し先の舗道の上に立っていた。そばを通り抜けながら観察してみると、皺だらけで手入れの良くない服の上から膝まで届くケープを羽織ったその風采には、どことなく奇妙に人を不安にさせるようなところがあった。口髭をたくわえた顔に黒い眼が光り、帽子もかぶらずにばさばさの髪だが、なぜかその容顔は見覚えのあるもののような気がした。男はすれ違った私たちをあとから追いかけてきて、やっと追いついた私の肩に手をかけてこう言った。

「すみませんが、ポーのよく歩いたという墓地へはどう行けば良いでしょうか」

私は道順を教えたが、そのあと突然わけのわからぬ衝動にかられ、お探しの場所までお伴しようとして出ていた。何がどうなったかよくわからないうちに、私たち三人は一緒に歩き出してしまっていた。それとはほぼ同時に、その男がローズを品定めするような目で眺めるのに私は気づいた。そこで憤りを感じて当然だったが、男の興味は情熱の色を帯びたものではなく、もっと冷静に相手を見きわめようとするふうで不愉快なものではなかったため、さほど気にならなかった。それでも時おり街燈の下を通り過ぎる機会を捉えて、私もまた男をできるだけ注意して見るようにし、その結果この男には見覚えがある、どこかで会ったことがあるという思いはますます強いものとなり、そのほとんど確信に近い思いは耐え難いまでの不安を呼び起こした。

男の服装は黒ずくめに近い陰気なもので、例外は白いシャツと氣どつて風になびかせているウィンザー・タイばかりだった。服にはプレスが効いておらず、といって長いあいだ手入れもせずに着古したわけでもなく、目につくかぎりでは汚れていない。額は高くつき出ていてまるでドームのよう、その下に黒い眼が印象深く輝き、顎は小さく窄まって丸味を帯びている。髪は私の世代のたいていの男よりずっと長く伸ばしているが、男の年齢好は私と同じくらいか、せいぜいが五つ年長といったところだ。それなのに男の衣服は、明らかに私と同世代のものではなかった。見かけは新しいにもかかわらず、実のところひと昔まえの型紙で裁断したときかと思えなかった。

「プロヴィデンスはあまりご存じではないご様子ですね」しばらくして私は男に言った。

「ちょっと立ち寄っただけなので」と男は短く答えた。

「ポーに興味がおありですか」

男は頷く。

「かなりお詳しいのですか、ポーについて」さらに私はそう尋ねた。

「いえ、ほとんど何も。あなたのほうがよくご存じらしい。何か聞かせてください」

それ以上催促されるまでもなく、ずっと以前から敬愛してやまぬ、推理小説の父にして怪奇小説の名手、ポーの生涯を私は手短かに話して聞かせた。セアラ・ヘレン・ホイットマン夫人とのロマンスについてだけは少し細かいことまでつけ加えたが、それはこのエピソードにはプロヴィデンスが関わっていたし、私たちの目的地である墓地は、ポーもホイットマン夫人を伴って訪れた場所だったからである。男は私の話にすっかり聞き入っていて、一言半句洩らすことなく記憶に留めようとしているふうだった。それでもその顔には何の表情も浮かばなかったから、話を楽しくてくれるのかつまらなく思っているのか、私にはまったく判断できず、いったいどういうわけでポーに興味を持ったのか見当もつきかねた。

ローズはローズで、男が自分に関心があるらしいと感づいたようだったが、べつにそのことで気を悪くした様子はなかった。おそらく男の関心が情欲とは関係のないものであることを感じ取っていたのだろう。男はローズに名前を尋ねたが、その時になってはじめて私たちのほうもまだ男の名を知らないことに気がついた。男はアランと名乗り、それを聞いたローズはほとんどわからぬぐらい微かにほほえんだ。街燈の下を通ったほんの一瞬だが、私はその微笑を見逃さなかった。

私たちふたりの名を聞いてしまうと、男はもう何も知りたいことがなくなったらしく、あとは三人とも黙ったままでやっと墓地に着いた。フラン氏は中へ入るものとはかり私は思っていたのだが、どうやらそうするつもりはないようだった。ただ場所を知りたかっただけで、また昼間にでももう一度足を運ぼうというところしかつたが、それはそれでもっともな判断ではあった。つまり、墓地をよく知っており、何度